



「また食べたい」
と人に思わせる料理
の壘惑的な秘密

若いときから第一線で活躍しつづける地井田シェフ。

念願の彼の弟子になるも、新作メニューを考えるシェフは部屋に引きこもり。

先輩曰く「年々、新作メニューを考えるのが辛くなってんだよ」と。

「シェフももう六十才で、料理人になって四十年以上だろ？
新作を考える発想が枯渇して、そろそろ潮時じゃね？って噂になってる」

「引退には早すぎます！」と先輩に噛みつき、噂にかまわず、日々の修行に励んだもので。

その日は俺がまかない担当。

チーズリゾットをふるまうと先輩方に好評だったものを「地井田シェフが呼びびだ」と聞かされて戦々恐々。

ノックをしておそろのおそろ部屋に踏みこむも怒鳴られず、深刻そうな顔をして「隠し味は？」と質問。

「こ、昆布茶です」と応じれば思いがけない提案を。

「まだ業界に染まっていない、きみの舌や発想力で新作メニューづくりの手伝いをしてほしい」

弟子入りして一か月も経たず、シェフの腕を間近で見れるまたとないチャンス。

「よろこんで！」と即答し、翌日から閉店したあと二人きりで秘密のメニュー開発を。

とはいえ、ほとんどの時間、シェフは愚痴や弱音を吐き、俺は聞き役。

「また食べたいと人に思わせる料理って、どんなのか分からなくなつてな・・・」

「おまえは、どんな料理だと思う？」と難題をふられて、新米ながら生意気にも意見を述べてしまい。

「人は料理を通してシェフを知って感じたいんじゃないですか？」

とたんに「それだ！」と目を輝かせたシェフは、俺を帰してメニュー開発に没頭。

果たして翌日、試しにふるまわれた「鶏の赤ワインソースがけ」を従業員は大絶賛し、新作をお披露目したとたん客が殺到。

が、「さすがシェフ！」と諸手をあげて喜べず。

日に日にシェフはやつれていくし、料理を欲する人が異様に見えたから。

単品で五皿も頼み、一心に食って、皿を舐めまわす客。

下げられたその皿をさらに舐めまわして恍惚とする従業員。

胸騒ぎがして耐えられず、シェフがソースづくりをするのを覗いたところ。

包丁で腕を切っては滴る血を鍋へと。

ぎよっとして厨房に跳びこみ、包丁を奪おうとするも突き飛ばされてシンクの角に頭を強打。

倒れたなら同時に勝手口が開かれ、多くの人がなだれこんできた。

一斉にシェフに群がり、肉が千切れたり血が噴きだす音が。

あたりに肉片や血が飛び散り、その一欠けらものこさず舐めとり飲み

こんでから人人は勝手口からでていく。

床にのこされたのは、艶やかで真っ白な人骨だけだった。